

『私のお父さん』

5年1組 この文をよみ
九重真澄

アイツはサイテーです。一言で言つてクズ男です。

私はお母さんとアイツが18の時の子です。早い話ができちやつた婚つてヤツです。

そういうと「授かり婚つて言え」と要求されます。

事実は変わんないのにめんどくさい……「はいはいヤツちやつた婚ね」と返したらものすごく怒られました。

アイツはものすごいダメ男です。現在の職業は自称パチプロ、ぶつちやけ無職です。

前は会社で働いてましたが、上司とケンカをしてやめたそうです。

私が小学校に上がった頃から、気が向いたら働いてすぐやめるをくり返しています。

うちのお母さんはバリキヤリなので安定した収入があるし、

アイツが家でゴロゴロしてても食べていくには困りません。

それ幸いとアイツはお母さんのスネをかじり倒しています。

「今ツギがきてるんだ、一生のお願い。一万、いや、千円でいいから貸してくれ！」

得意技は土下座です。焼いた鉄板の上でやればいいのに。

そんなアイツに愛想を尽かし、もう一切お小遣いはあげないとお母さんは宣言しました。

あっぱれな決断です。

お母さんはアイツに真人間になつてほしいのです。「反面教師にしなければならない父親なんてお呼びじゃないのよ」とグチつてました。

なのにアイツはお母さんと私を裏切りました。

こないだ学校から帰つた時の事です。部屋で何か物音がしました。

もしかしてドロボーかな、と思い、そつとドアを開けてびっくりしました。

アイツが私の貯金箱を壊し、お金をとろうとしていたのです。

「うっかり手がすべつちまつて」

「壊したのはわざとじゃないんだね。盗もうとしたのは」

「借りようとしただけ」

「返済期限は？ 来週？ 来月？ 来年？ 一生借りっぱなしは返すって言わない、まさか来世でも踏み倒す気？」

「さすが俺の娘容赦がねえ！ 頼むこの通り、見逃してくれ！ コイツを元手にパチンコ行つてパーツと稼いでくるから、なんでも好きなもんとつてきてやる、チョコ？ 乾パン？ サバ缶？ ニンテンドースイッチ？」

「小5の女子を乾パンサバ缶で買収できると思ってるなら新しい脳みそと交換してきなよ」

「サバ缶はうまいんだぜ、オツな味つて表現がびつたりく

る」

「ていうか、ニンテンドースイッチなら今年の誕生日にもらったし」

「そうだった？ 似たようなの多くてわかんなくてさ、あはは……じゃあスマホは？ 前から欲しがってたろ、一緒に頼んでやる。あ、でも裏サイトとか見んなよ？ 18歳未満インター禁止の注意書きはちゃんと守れよ、お父さんと約束だ。ちなみに未満と以下の違いトリビア、以下は18歳も含むってことな、勉強になったろ」

小指を立ててゆびぎりげんまん、へろへろ父親風ふかすがマジでうざい。

今ので私に全然興味がないこと、ニンテンドースイッチの購入資金はお母さんの全部持ちだどバレて、もとからゼロに等しい好感度が大暴落。

机の上に転がったくまもんの残骸を見ていると、しみじみ哀しくなりました。

家族で最後に行った、熊本旅行のおみやげだったのに……

小学生にサバ缶のありがたみを語る父親にもゲンメツしました。

白い目で見ている私をよそに、ちゃっかり千円札をポケットに入れようとするのも許せません。

私の机はくまもん殺害現場です。

容疑者は目の前にいる。こんなことならプラスチックにするんだった。

だんだんムカムカしてきました。

図々しい小指をぱしんとはたきおとし、言つてやります。

「顔も見たくない」

仕事から帰つて来たお母さんに、さつそく今日の事をチクりました。お母さんはめちやくちやキレて、アイツを叩き出しました。

せいせいしました。

一生のお願いは乱発するもんじやない。

大事な時に切り札が尽きるから。

人間つてへんなの、ギリギリ死にそうな時にどうでもいいこと思い出す。私の場合小5の時に書いた作文。授業参観で読まされ、悪い意味で皆をあつと言わせた。

「てかドン引きだよね……」

無理もない。授業参観の日に発表する作文ときたら、大抵は親への感謝を綴つたものだ。毎日おいしいごはんを作つてくれてありがとうとか、休みの日にキャッチボールしてくれてありがとうとか。

世の中親の風上にもおけない手合いが多いけど、血の繋がつた実の親父をあそこまで作文でこき下ろしたのは、ことによると私が初めてかもしれない。

そりやどういふ顔したらいいかりアクションに困るよね、とちよつぱり反省する。

でも私、覚えてる。

教室の後ろ、一様に微妙な表情でたたずむ保護者の中で、スーツのお母さんだけがこつそり親指を立ててくれた。ぐつじよぶ、娘。

当時は実に反骨精神旺盛な小学生だった。離婚したのちのお母さんの教育がよかつたのか、今じや随分丸くなったものだ。

ああいけない、またどうでもいいこと考えてる。
しつかりしろ私、現実から目を背けるな。

「よし。イケる」